読みながら　考えながら

顧問教官　塚本勝義

青年期の太宰治は、談たまたま小説のことになると端然と坐りなおすのが常だったという。こんな話をきくと痛ましい感じ、ありがたい感じがいりみだれる。太宰だって飯を食って生きた人間、もちろん雑駁なところもあるが、すばらしく純粋なところもあったようだ。

晩年の太宰は心中相手の女に「千種」という小料理屋の二階に罐詰にされていたという。この女は太宰を完全にトリコにしなければ、気がすまなかったらしい。私は太宰は弱い男だったとは思わない。しかし「弱さも持っていた男」と思われる。この弱さが命取りになったのであろう。

○　○　○

ある日、八百屋さんの店頭に立っていたら三橋美知也の歌っている声がきこえた。テレビらしかった。その中に啄木の「やはらかに柳青める北上の　―」がはいっていた。びったりしていた。流行歌の中に入れても十分調和するのが啄木の歌だ。彼の歌にははばがある。煙草の広告に入れてもおかしくない。いわゆる高級なお方にも魅力があるし、大衆にも愛されるのが啄木の歌だ。国民文学の資格を備えている。

○　○　○

でたらめは政治の世界だけに限定されない。文学の世界にもざらにある。平林たい子さんはプロ文学華かなりし頃を回想して、仲間ぼめをやらないと、つるし上げをくったと言っている。これだから批評を頭から信ずることは馬鹿らしい。純粋な批評もあろう。しかし、でたらめな批評も横行している。ハーンが、作品の真価を決定するのは大衆であって、決して批評家なんかでないと断言したのはあたっている。

○　○　○

セリフを書いているとノドが疲れる。セリフを書く動作と、しゃべる動作は強く結びついていると安部公房が述懐している。考えさせられる。ノドに影響のないセリフ執筆は単なる手先のいたずらかも知れぬ。本当の仕事は、それがどんなに小さい仕事であろうと全人的活動であるからだろう。

○　○　○

スタンダールは恋愛論の中で、何から何まで強い人間はないと言ってる。戦争には強いが政治にはからきし弱い人間もあった。鷗外なんかも学問と翻訳と創作には、すばらしく強かったが、後妻さんにはだらしないほど弱い夫だった。トルストイもこの仲間だろう。

○　○　○

これは一時間で描き上げた作品ではあるが、と同時に全生涯をかけた作品であるとヴェルネを言っている。文句なしに頭がさがる。

野球に「全力投球」ということばがある。その効果の良し悪しは別として気持ちいいことばだ。天才はいざ知らず、凡愚な私などは「全力投球」以外に生きる術を知らぬ。若い頃はうまく生きようという器用な工夫もしてみた。が、片端からボールだった。まさにタソガレに突入した現在では、練習で投げる一球にも全力をそそぐだけだ。賢い人が見たらくだらんことに力を入れると笑うだろう。

○　○　○

アメリカのウイリアム・バロウズという男は「裸の昼食」という作で、排泄の模様を事こまかに書いたそうだ。新描写だろうが、馬鹿げている。排泄だって人間のいとなみに相違ないが、眺めてよろこべるいとなみではない。この作品は発禁となったそうだ。アメリカにも良識がある。

「新」を求めるのはいい。しかし「価値ある新」を求めるべきだ。日本にも「排泄的新

を求める見当違いが絶無と言えまい。

○　○　○

近世の本居宣長は、やはり本当の仕事をしたと思う。彼は文学作品の研究において、分析的、文献的研究をすると同時に、文学性の探求もやって、文学そのものの本質を究明している。然るに現代の文学研究者の研究は文学性探究に及んでいない。その方は批評家にまかせきりといった実状にある。宣長に及ばざること甚だ遠しと評しても過言でない。

○　○　○

先日、コンパで雑談していたとき、ある人が、樋口一葉はずるくっていやになってしまったと言った。卒論で一葉の日記を扱った人だ。たしかに一葉にも利口過ぎるところがある。俗なところがある。決して彼女は純粋百パーセントの女ではない。

一葉が五十円借金したか四十九円借金したかをつつきまわすよりも、彼女の「ずるさ」を発見した方が、はるかに私たちの生きる糧になる。こんなことをいうと、功利的だと口とがらせる人もあろう。しかし、人間の利、人間生活の利にならぬ文学研究にどれほどの価値があるのだ。